

JFM だより

Vol.19

INDEX

融資の実	北海道上川郡東川町 東川町立東川小学校	P01
	がんばる公営競技 ポートレース平和島	P05
	自治体ファイナンスよもやま話	P07
	地方支援ダイアリー	P09
	基金運用ひとくちメモ	P11
	人事交流日記&ふるさと紹介	P13
	編集後記	P14
	機構からのお知らせ	P15
	私たちもJFM債買ってます！	P15

今号の表紙

北海道上川郡東川町 東川町立東川小学校





Feature

北海道上川郡東川町
東川町立東川小学校



コミュニティ施設を併設した 地域ぐるみで子どもたちを育む小学校

東川小学校の建設は、単なる校舎の建替えではなく、新たな敷地に小学校とコミュニティ施設である地域交流センターを複合化し、また、サッカー場、野球場、体験農園、プレイパークなどを備えた東川ゆめ公園と一体的に整備することによって、町の将来を担う子どもたちを地域ぐるみで育成しようという考えに基づき計画されました。



開放的な教室



小学校と隣接する軟式野球場、サッカー場、多目的広場

118年の歴史を誇る学校の建替え事業

東川小学校は、全校児童350人(平成28年8月31日現在)、明治31年に開校した118年の歴史を誇る小学校です。

旧東川小学校は、昭和34年・35年に建築された校舎の増改築を繰り返しながら、現在地に移転する平成26年までの55年間にわたり、学び舎として利用されてきましたが、校舎の老朽化に伴い、平成20年に東川小学校等建築検討委員会が設置され、建替えが検討されました。地域住民等へのアンケート調査や先進地視察等が行われ、学校の全面移転及び地域交流センターを併設する複合施設とすることが決定し、平成23年3月に北海道大学工学研究院都市地域デザイン学研究室の協力を得て、東川小学校等基本計画が策定されました。その後、平成24年11月に工事を着工し、平成26年3月に完成。その後、校舎の備品等の整備を行い、同年10月1日に新東川小学校が開校しました。

地域交流センターや広大な公園を併設

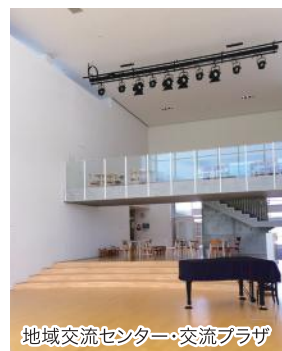
東川小学校の敷地は約4ヘクタール、地域交流センターや一体となった東川ゆめ公園を含めると約16ヘクタールという広大な施設となっています。

「教育は、学校だけで完結するものではなく、住民の方々にも気軽に参加していただいて、地域全体で子どもを育てる、

応援するという雰囲気をつくり出すことが大切です。東川町は子どもからお年寄りまで自然に挨拶を交わしたり、声を掛け合ったりする人々のつながりが深い町です。そうした地域特性を活かした東川町らしい施設をつくりたいと考えました。」(東川町教育委員会・杉山昌次学校教育課長/「」内のコメント以下同)

敷地の周囲には塀などの垣根をつくらず、小学校のグラウンドに接した公園にある人工芝のサッカー場や軟式野球場、天然芝の多目的広場は、一般の人々も利用しています。その他にもプレイパークや体験農園、果樹園があり、子どもたちを中心に様々な活用されています。

校舎の隣にある地域交流センターには、交流プラザや多目的ホール、学童保育施設があり、「児童が放課後に地域交流センターの学童保育施設へ行って宿題をしたり、ここからスポーツ少年団活動に出向いたりします。学校、公園、コミュニティ施設とそれぞれに垣根をつくってしまうのではなく、一体的に整備することで子どもたちに自由に、伸びやかに使ってもらう。そこに大人も積極的に参加することで地域で子どもたちを育むという考え方がここにはあります。」



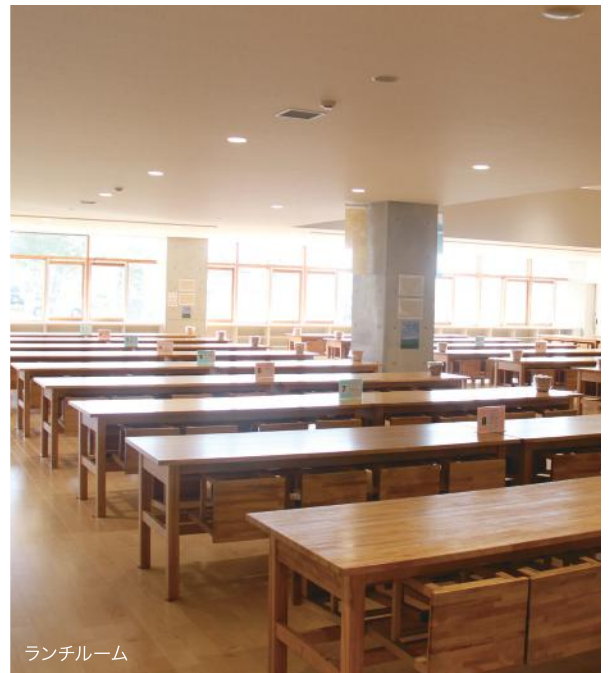
地域交流センター・交流プラザ



体育館



可動式の棚



ランチルーム

災害時には住民の避難所として機能

垣根をつくらないオープンな施設づくりの発想は校舎にも活かされています。各教室と廊下を隔てる壁をなくし、可動式の棚で様々な空間をレイアウトすることができます。また、広々としたランチルームでは、全校児童と教職員と一緒に給食を食べます。この時には1年生から6年生で縦割り班をつくって、各学年が交流できるように工夫されています。

「あえて北側に大きな窓や明かり取りを配置することで、やわらかな光を採り入れて、開放的な空間をより心地よくしています。また、夏場の暑さも抑えられます。北海道は太陽角が低いので、南側に窓を大きく取ると直接光が目に入りやすく

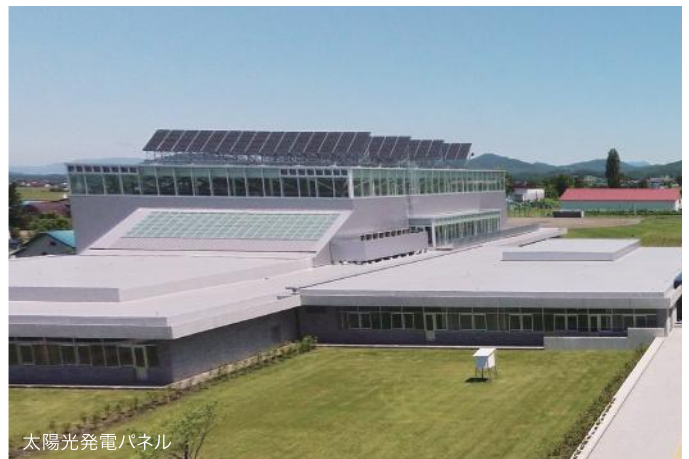
授業の妨げになります。」

設備面では、環境配慮型電化システムである空気式のヒートポンプを採用しています。二重床を活かした床下空調方式により、夏にはトレンチを介した外気誘導による涼風を送り、冬にはヒートポンプによる暖房と同時に躯体のコンクリートに蓄熱させ、輻射作用による穏やかな熱環境をつくることで校舎内を快適に暖める省エネシステムになっています。

新東川小学校は、旧東川小学校の老朽化に伴う耐震化のための立替えを目的として建設されました。災害時には住民の避難所として機能するため、50kWの太陽光発電システムや蓄電施設、ディーゼル発電機による発電装置室など、災害に備えた設備を有しています。これらの整備の財源には緊急防災・減災事業債が活用されています。



北側の窓から射し込むやわらかな光



太陽光発電パネル

地元の木材をふんだんに使った校舎

「東川町は木材が豊富で家具づくりが盛んな町です。校舎も地元産の木材にこだわり、床は樺材のフローリング、窓枠の内側には唐松材を使っています。また、児童の机や椅子をはじめ、各施設の棚やテーブルも地元の木材で作られたものです。さらに校舎内には、地元アーティストの手工芸品が飾られ、温かみある雰囲気演出しています。」

校門には、イタリアを拠点に活動する彫刻家、北海道出身の安田侃(やすだ かん)氏の作品『帰門』が置かれています。「子どもの頃から本物を見て、本物に触れる体験は大切なことです。『帰門』という作品には、子どもたちがこの小学校を卒業して、たとえ他の地域へ行っても、ふるさとである東川町にいつか戻ってきてもらいたいという願いが込められています。自分たちが地域の人々にお世話になったように、今度は自分が東川町の力になりたいという卒業生が増えてほしいと思います。ここは子どもたちを育むとともに、地域の未来を育む小学校です。」



「写真の町」宣言から31年。水と美しい自然に恵まれた東川町。

北海道上川郡東川町は、旭川市の南隣。上川郡東神楽町にある旭川空港から約7kmという位置にあります。東部は山岳地帯で大規模な森林地域を形成しています。また、日本最大の自然公園「大雪山国立公園」の玄関口で、観光地として人気のある北海道最高峰「旭岳」(標高2,291m)や原生林に囲まれた旭岳温泉、落差約270mの「羽衣の滝」を擁する天人峡温泉周辺では、高山植物の花々、新緑の森、色とりどりの紅葉、幻想的な雪景色など四季折々の美しい風景を楽しむことができます。

東川町は全国的にも珍しく、北海道でも唯一の上水道の無い町です。大雪山連峰からの雪解け水が長い年月を経て地中にしみ込み、伏流水として東川町へ運ばれ、この良質で美味しい自然水を生活水として利用しています。町内にある「大雪山旭岳源水」は、豪快に湧き出る源水を取水できる名所となっています。

そうした水資源に加え、肥沃な土壌を活かし、道内随一の米どころとしても有名で、道内で初めて地域団体商標に登録さ

れた「東川米」を生産しています。また、木工クラフトが盛んで、旭川家具と呼ばれる家具の生産工場や工房の約40%は東川町にあります。

東川町は、昭和60年に「写真の町」を宣言し、平成26年に「写真文化首都」を宣言しました。その被写体となる自然や町の景観を大切にするとともに、伝統ある「東川町国際写真フェスティバル」をはじめ、高校生による大会「写真甲子園」や海外11か国の高校生が参加する「高校生国際交流写真フェスティバル」といった独自のイベントを開催しています。さらに、地域の子どもたちを対象にした「写真少年団」の活動や地域住民による写真に撮って美しいと感じられる地域づくり活動など、写真文化の中心地として「世界中の写真、人々、そして笑顔に溢れる町づくり」に取り組んでいます。



北海道上川郡東川町

人口 8,116人(平成28年6月末現在)
世帯数 3,694世帯(平成28年6月末現在)
面積 247.06km²

